渋沢栄一の死

斎場に向かう栄一　渋沢史料館所蔵

1931（昭和 6） 年 11 月 11 日、栄一は飛鳥山の自邸で家族に看取られながら、91 歳の生涯を終えました。直腸がんを患い、前月に開腹手術を受けましたが、最期は安らかに息を引き取ったそうです。

同年の 11 月 15 日に、栄一の葬儀が東京・青山斎場で行われました。栄一との別れを惜しむ市民が大勢駆けつけ、葬列を見送りました。左の写真は現在の北区の本郷通り一里塚付近の様子です。

写真を見ても分かるように、棺とともに何十台もの自動車が列をなし、飛鳥山を出発しました。門を出ると、滝野川町民、各小学校の児童・生徒らが整列して葬列を迎えました。さらに青山斎場までの沿道には、栄一が関係した日本女子大学校、東京女学館などの生徒がびっしりと並び渋沢栄一の死を悼みました。こうした場面からも栄一が多くの人たちから愛されていたことがわかります。葬列は斎場から谷中の寛永寺墓地へ向かい、近親者の焼香の後、埋葬されました。お墓は、生涯に渡って栄一が主君として慕ってきた徳川慶喜の墓の近くにあります。

【養育院巣鴨分院生徒の作文　～栄一の死～】

復刻版　『東京市養育院月報』第 23 巻（昭和 6 年 1 月～12 月）不二出版より引用

（分かりやすいように現代かなづかいに修正しました）

〇我らの悲しみ　實補一　浅見きみ子（15 歳）

あぁ、なんという悲しさだろう、なんだかこの世の中がまっくらになったような気がします。11 月 11 日午前 1 時 50 分、この言葉を聞くと私は、胸がどきっといたします。ちょうど針で心臓でもつかれるような気がします。あぁ、もう院長様は、この世の人ではないのだと思うと悲しさは一層加わってきます。院長さんが、養育院に関係なさってから今日まで五十余年間も私達のために日夜ご心労下さいましたことを思ふと、何と言ってお礼を申し、ご恩返しをしてよいかわからない程有難く思ひます。私達は院長さんのお亡くなりになった後は悲しく淋しく暮らして行かなければならないのです。院長さんの御写真を拝みますと、何となくなつかしく在りし日のことどもが次から次へと心の中に浮かんでなつかしくなってきます。私達は毎朝・毎晩この御写真の前に座って冥福を祈りいたしております。私達は院長さんにさんざんお世話なつたご恩返しにお亡くなりなった日を永久に忘れないよう心にとめ立派な人となるように努力していきたいと思っております。

〇亡くなられた院長さん　尋六　山田新次郎（十六歳）

日夜我々がお祈りしていた甲斐もなく我らが尊敬してお慕いしていた澁澤院長には十一月十一日午前一時五十分九十二歳のご高齢をもって飛鳥山のお屋敷でこの世をさられました。院長さんは我々を子のようにかわいがってくださり、松平定信公のご命日である毎月十三日にはこの院へおいでになり、身の上のお話や我々の世の中に出たときに役立つお話しをしてくださりました。それも今年の六月十三日がおわりでありました。我々は又お目にかかる事が出来ることを心待ちしていたが、ついに亡くなられてしまったので、残念に思っています。これは僕一人の悲しみではなく、院全体の悲しみであります。院長さんが九十歳になられた時、私も皆さんも共に一つの年をとりましたが、私の一つは、九十分の一で、皆さんの一つは、十幾分の一であるから割合は皆さんの方が大きいので、よってその時間から見れば同じでも割合の大きい皆さんは、よく勉強しなくてはならないとおっしゃっていました。僕は早く立派な人となって、万分の一なりご恩に報いたいと思って一生懸命勉強していましたが、今は亡き院長さんとなられてしまいました。しかし、院長さんのお志にそむかぬよう立派な人になって地下の院長さんのご恩に報ひようと思っています。

令和 2 年 6 月号より始めて令和 3 年 12 月特別号までの 23 回、渋沢栄一について学校だよりに掲載させていただきました。今回の特別号をもって最終号とさせていただきます。1 年半に渡りご愛読いただきまして誠にありがとうございました。